

※注 釈

親鸞聖人は、私が本願を信ずることも、念仏を申すことも、すべて阿彌陀仏の本願力のたまものであると領解りょうげされたのでした。

◎如来に背き果てて、本願を信ずる能力すらない不信心の身に、

「そのままをわれにまかせよ（南無）、必ずたすける（阿彌陀仏）」

とよびかけて私の疑いとためらいを破り、

「おおせにしたがう」

信心となり、

「お願いだから念仏してくれよ」

とよびかけ、念仏の声となって私の上に実現しているのが阿彌陀仏の本願のはたらきです。

【本願力回向】

阿彌陀仏は南無阿彌陀仏なもあみだぶつというみことばとなって、私の上にとどき、信心となり、念仏となって、私を念仏者にたらしめ、浄土にむかえとるはたらきそのもの。

【信心】

如来の願いが、このわたしにとどくこと。親鸞聖人は生きてあることの意味も知らず、命の行方も知らずに迷いつづけている愚かな私にむかって、生死の彼方から「至心ししんに信しんぎょう 樂して、わが国に生まれんと欲おもへ」大悲をこめてよびかけておられる。

「わたしには何一つみさだめることができませんが、あなたのおおせにしたがって、浄土に生まれさせていただく身であると、疑いなく思い定めさせていただきます」とおせにしたがうことを信心という。

信は願より生ずれば 念仏成仏自然じねんなり…

「高僧和讃」

○信心とは、如来の願いが、わたしにとどいたことですから、「如来よ りたまはりたる信心」（歎異抄）ともいわれました。

【信心】万人平等の救いを願う阿彌陀仏の願信そのものであり、仏信であるから、その心をいただければ、煩惱具足の凡夫も、ただちに仏にならしめられると信心正

因のいわれを明らかにされたのが親鸞聖人だったのです。

【正定聚】

この世にありつつ浄土の聖者の仲間

眞実の信心の行人は攝取不捨のゆゑに正定聚しょうじょうじゅの位に住する。

このゆゑに臨終まつことなし、来迎たのむことなし、信心

のそだまるとき、往生またさだまるなり。

「御消息」

「正定聚」：正しく悟りの世界に生まれ、仏陀となることに決定している聖者の仲間

本願を信じ念仏する行者は、すでに如来に攝取されているから、もはや迷いの境界に退転することなく、確実に仏にな道を歩ましめられている。

【悪人正機】

本願に我が身のすべてを託たくしきっている悪人こそ自己中心的な想念のとりこになり、ある時は愛欲に、ある時は増悪に、絶えずゆれ動き、生きてある限り煩惱の支配から抜けだすことのできない私どもは、どんな修行によっても生死の苦海を超えることはできません。それを悲憐しておこせれた本願ですから、「他力をたのみたてまつる悪人、もつとも往生の正因なり」といわれたのです。

▽「悪人が、往生の正因である」といわれた言葉をどう理解すべきかということについて古来、さまざまにいわれてきました。しかしこの文脈によれば、罪深くしか生きられないものを憐あわれみ、その罪業ざいごうゆえに大悲をおこして浄土へ生まれさせようと誓われた阿弥陀仏の本願を信じ、そのはからいに、わが身のすべてをまかせている悪人こそ、第一に往生成仏の果を得るべき正当な位置（因）にあるものであるというので「正因」といわれたのであらうと思えます。

◎親鸞聖人は「善人なほもって往生をとぐ、いはんや悪人をや」と教えられた法然上人の聖語をこのように領解されました。それゆえ最後に「よって善人だにこそ往生すれ、まして悪人は…」と法然上人は仰せられたのであると結ばれたのでしよう。